

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號三第 卷九十二第

行發日一月九年四和昭

論 叢

相續税の弱點 法學博士 神戸 正雄

津藩の均田策 經濟學博士 本庄榮治郎

經濟靜學と經濟動學 文學博士 米田庄太郎

說 苑

我國の經費増加と物價の變動 經濟學士 小山田 小七

講 演

上海の社會狀態 法學士 櫻木 俊一

雜 錄

越前米浦の農民逃散 經濟學博士 黒 正 巖

獨逸^{に於ける}交通政策研究の現況 法學士 前田 稔 靖

投資トラストに關する一考察 經濟學士 一谷藤一郎

艦船工場に於ける職工の生活 經濟學士 芝 元 一

物價指數に關する一論 經濟學士 木村喜一郎

マイヤー文庫 經濟學博士 汐見 三郎

近着外國經濟雜誌主要論題

獨逸に於ける交通政策 研究の現況¹⁾

前田稔 靖

一

交通政策の科學的研究の範圍及程度に關する當面の大問題は、先づ第一に次の如き問題の闡明を必要とすることである。即ちそれは最近に於て斯學の専門家がどの程度まで交通事項の研究を遂げたかと云ふことである、併しながらこれは誠に僅少であると答へざるを得ない。交通政策上に於ける業績を例へば貨幣政策、貨幣本位政策若は社會政策等の如き他の政策の領域に於ける業績に比較し、又は交通政策に於て取扱ける、

1) A. F. Nappzin, Verkehrswissenschaft und Verkehrspolitik. (Zeitschr. f. Verkehrswissenschaft. 7. Jahrg., Ht. 1, 1939.) の一部紹介

問題の價值を考へて見ても誠に見るべきものはない、實際に於て若し交通技術の科學から出た人々や、又は交通管理及交通經營の科學から出た最も學理的に教養された實際家などの協働若は對立の業績がなかつたならば、交通事項の經濟學的取扱は出來ないものとせられたかも知れないのであつて、理論的國民經濟學の交通學的顯著なる業績は僅に指を屈するに過ぎないのである。之に反し交通界に於ては歴史學派が幾多の研究業績を残したと謂ふことが出来る。その最も重要な業績として數へらるべきものは、エツケルト及ゴットハインのライン航行論（前者は一九〇〇年後者は一九〇三年の出版）、シャンツの十九世紀マイン航行論（一八九四年出版）等がある。併しながら歴史學派は大體に於て其の業績が非常に分裂したために、その高遠なる目的を達することが出來ず、從て幾分か初學者の輕侮を招き易からしめたものである。十九世紀の歴史に關する研究の概要を示すには、交通歴史に關する大なる研究に屬するものとして、一二の國民經濟學者にある

らざる人々の著書を擧げてよからうと憶ふ。即ち前郵便總監ステフハン氏の著普魯西郵便史（一八五八年出版）を一九二八年に局長ザウター氏が一八六八年までの事實を追加して新に獨逸郵便史の第一部として出版したものと如きはそれである。郵便も河川航路も、獨逸の河川航路中の最も重要な部分であるエルベ及ウエーゼル兩河に就ては幾多の見るべき論文があるが如く、孰れも共に其の發達に關して、十九世紀の初葉に於て基礎的著書があつたものであるが、七十年代に於ける國家的大經營となるまでの獨逸鐵道史の著作の如きは就中最も重要なものの一つである。これに關しては個々多數の著作もあるが、孰れも皆千篇一律のものであつて、予は此に只クンプマンの一九三〇年より一八四四年に至るライン鐵道株式會社の成立（一九〇一年出版）及フォン・デル・ライエンのビスマルク公の鐵道政策（一九一四年出版）だけを擧げるに止める。獨逸の航海史に於ては世界大戰以前に於て、刮目に値する著作の多數があつた。即ちオットー・マチーの一九

一四年から一九一四年に至るハムブルグ船舶業（一九二四年出版）、クルト・ヒーマーのハムブルグアメリカ線航海史（一九二二年及一九二七年出版）、パウルのイバウルの一八五七年より一九〇七年に至る北獨逸ロイド會社（一九〇七年出版）、及フルデルマンのバリン傳（一九二二年出版）、とか、スツプマンの同じくバリン傳（一九二六年出版）等がそれである。

二

更に交通政策的領域に就て、大學に於ける經濟學教授の業績を窺ふ時は、國民經濟政策に關する許多の大教科書の一部を爲す所の交通制度及交通政策の論文（即ちフオン・コーン、コンラッド、フヒリツボウキツチ、ワグナー等の著作）もあるが、要するに國民經濟的著作に於ては單に交通制度及交通政策の二大著あるのみと謂つて差支ない。即ちザツクスの大作『國民經濟及國家經濟に於ける交通機關』（一八七八—七九年第一版二冊もの及一九一八—二二年第二版三冊もの）及

フハン・デル・ボルヒトの著『交通事項』（一八九四年第一版、一九二二年第二版及一九二五年第三版）の二大著作である。フハン・デル・ボルヒトは豊富なる技術的統計的及行政的考察を以て、社會經濟的問題を討究したに對し、ザツクスの著作は文體が難解である上に第二版に至つて處々餘りに冗長に失し、且時の驛歩に遅れてその交通界に關する材料が多くは古びたものであり、加之多くの點に於て其の所論に肯定し難いものがあるに拘らず、尙交通學上に於て權威とされて居る。

願ふにこれは獨逸人が交通學上に於ては僅かに二つの著作を有するに過ぎざるのみならず、其著作も出版以來既に五ケ年も経過して居ると謂ふ事實からして、獨逸の科學的研究上交通學に於て比較的修養の足らざることを反證するものと謂はねばならぬ。試にこれを交通制度及交通政策に關するアメリカ學界の著作と比較して見るがよい。該國に於て最近出版された交通事項に關する著作として、此にジャクマン（一九二六年出版『交通經濟學』）、ダーゲット（一九二八年出版『內國運

輸原論』及ジョンソン、フューブナ、ウキルソン（一九二八年出版）三氏共著『運輸原論』諸氏の著作を擧げるだけにも思半に過ぐるものあらん。

更に進んで重要な個々の研究を尋ねんに、差當り國民經濟學者の内にて、今日に於ては既に古い時代に屬する人々、殊に世界大戦前に科學的交通政策に多大なる貢獻のあつた次の如き人々を擧げることが出来る。即ちロツツ（一九〇〇年より一九〇〇年に至る獨逸交通發達史四回分版一九二〇年出版）、シューマツヘヤー（『内國航行稅問題』一九〇一出版）、テイス（『現代獨逸の航海及航海政策』一九〇七年出版）ウキーデンフェルト（『西北歐洲の世界的港灣』一九〇三年出版）及ウキルミングハウス（『ライン航路の狀況と編制』一九一三年出版）等である。最近十年間に於て交通政策に關する經濟學者の専門的著述は僅かに次の四大作に過ぎない。即ちエルヴキン・フォン・ベツケラートの『獨逸鐵道の港灣關稅政策』（一九一八年出版）、ズフェン・ヘンダーの『國際航海の危機』（一九二八年出版）、フォ

ン・デル・ライエンの『一九一〇年より一九二〇年に至る獨逸の鐵道』（これは獨逸政府の交通省から出版せるものである）及ナツプ・チンの『一九一三年より一九二五年に至るライン航路』（一九二五年出版）とその『内國航路と鐵道』（一九二八年出版）とである。

三

國民經濟學者が交通政策に對し比較的寄與する事が鮮なかつたことは、他の場合に就て見ても能く分明る。即ち先づ最近十年間に於ける國民經濟學に關する大雜誌を調べて見るがよい。交通政策に關する大論文の數は驚くべき程稀少であつて、僅かに『國際經濟雜誌』や『コンラッド國民經濟及統計年鑑』中の記録又は雜錄の欄内に小記事を發見するに過ぎない。更に又獨逸第一流の經濟學會である社會政策學會の研究及討論に就て觀ても、亦同じく交通政策に關するものは寡少と謂はざるを得ない。縱令世界大戦以後に擡頭した交通問題は多數であるに不拘、該學會は交通以外の實際

問題は好んでそれを研究の題目とするに反し、最近二十年間に於ては交通事項の如きは、全く之れを閑却したものである。尤も他の問題の研究の序に時々交通事項に觸れたことがないではない。然るに二十世紀に入つてから該學會は、一方には河川航路（該學會の報文第百卷から第百二卷）及航路課税問題（該學會の報文第百十五卷及第百十六卷）に就て、他方に於ては航海從業員の位置（該學會の報文第百三卷第百四卷及第百十三卷）に就て、精細に論究するに至つたのである。而して一九二七年の秋に至り、獨逸に於ける第二流の新進國民經濟學者の學會である『フリードリッヒ・リスト學會』が『現代獨逸の交通問題』に就て有益なる討論を行ふに至つたことは遂に斯學のため祝福せざるを得ない次第である。

既に述べた如く、國民經濟學者は交通事項の研究に力を用ゆることが薄弱であつたが、併しそれがため却つて他の方面から莫大なる援助を得ることになつたのである。顧ふに交通事項に就て國民經濟學者がかく冷

淡であつたことは、交通技術家及交通實際家が必死の努力を盡して居るがため、獨自固有の仕事として幾分か遠慮したのであつて、自己の判断を以つて意見を發表するまでには、先以て雜解紛糾せる材料を仔細に研究した上の事であると考へたからである。交通制度及交通政策に關して、就中鐵道技術者の側から二人の名を挙げねばならぬ。即ちオットー・ブルム及カール・ピラートの二人である。彼等は多くの著述の中最近（一九二八年）『獨逸航空事業の死活問題』なる獨逸の航空政策に關する最良なる共著を公にして居る。ピラートの業績としては主として交通事項に關する有益なる多くの論文があるが、ブルムに至つては、同一傾向を有する多くの小品の外に、幾分か通俗にして而も學理的にも極めて興味ある著述『世界の交通と其技術』（二冊もの一九二二年出版）と、建築技術家必携の中に載せてある『鐵道交通』なる寄書（一九二五年出版）とがある。

四

交通實際家の科學的業績を窺ふときは、先づ何よりも鐵道實際家の方面から出た廣衍なる業績を挙げねばならぬ。鐵道國營の性質として、外部に對しては手廣く而して自己は孤立の状態にある所からして、技術的經濟的及法律の混合體である特殊なる鐵道學なるものが發生したのである。斯學に關係ある科學の局外者にして斯學の範圍に就て諒解のあるものは定に鮮ない。獨逸に於て鐵道の經濟及法律に關する科學的の業績を發表して居る最も著名なる一刊行物は鐵道事報である。該誌は最早や五十年（一八七八年から）以前よりフオン・デル・ライエン氏の出版に係るものであるが、最近に至つては國營鐵道が自ら交通學的書籍の出版者となり、獨逸國營鐵道内に在る有限責任交通學用器會社なる特別機關を利用して努力して居ることは推稱に値する。この種の出版物は無論先づ國營鐵道の役人及使用人の需要に應じたものであるが、その内には

科學的の價値あるものも鮮くはない。鐵道學の領域に於ける個々の人々の業績に關しては、その關係學者の範圍が餘りに廣きと、その稱揚すべき人々を適當に限定することが困難であるによつて、その人々の名を擧ぐることを全然省略したのであるが、『獨逸交通年鑑』（一九二一年及一九二二年の分のみでその後廢刊した）とか、現代獨逸鐵道に就て『國營鐵道』（一九二〇年出版）『獨逸國營鐵道會社』（キツテルと共著にして一九二七年第二版刊行）及『鐵道の交通宣傳』（一九二七年出版）等の著者であるザルターの名だけは擧げずに措くことは出来ないと共に、尙講演等に於て知られて居る、國營鐵道の最高指導者であり交通學の功勞者たる總裁ドクトル・ドルプミュラー及局長フオーグトの名はこれを逸してはならぬ。

國營鐵道に於けるが如く、國營郵便も亦太しく世間離れがして、恰も集約に耕作した孤立の植物園の如き單獨的のものとなつた。これには鐵道事報と並行して發刊が古いだけ幾分か尊重されて居る郵便電信事報

(二八七二年以降續刊)がある。郵便事務の主任者の多數に依つて出版されて居る『學理と實用とを兼ねせる郵便及電信』は、國營鐵道内にある交通學用器會社の刊行物の如くに、その所屬從業者の研究の修養的業績の證據となるものである。

國營鐵道及國營郵便の領域に於ける交通學的業績に較べて見るに、所謂自由交通業者殊に航海及河川航路業者の業績は遙にこれに及ばない。此等の人々の教養からして大體説明を要するまでのことはない。併しながら其指導者等の著作した文獻にして此に特に現代に注目すべきものがないではない。就中船舶業者の巨頭の代表的講演及論文(クノー・スチンミング其他の航海に於ける、オットー・ヘヒト其他の河川航路に於る)があり、又交通分科に於てのみ見るべき著作として擧ぐべきものに、エーリヒ・ムルケンの『大西洋橫斷航海業者大聯盟、プール業者及利益組合』があり、ワルター・シユミツツ及ジードグの共著出版に係る『五十年間のライン交通政策』なる集成本がある。

終りに交通行政の範圍から出て居る業績を見落してはならない。クルト・ギーゼの著作に係る『海運關稅』(一九一九年)及『國營鐵道政策の主要問題』(一九二八年出版)等は就中特殊のものである。